HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	獣医学部．一　学部独立前(農学部時代)．二　獣医学部の独立．三　講座増設と学部の充実．四　獣医学部新館建設．五　六年制へ向けて．あとがき．年表
Citation	北大百年史，部局史，1015-1055
Issue Date	1980-03-20
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/29988
Type	departmental bulletin paper
File Information	bukyokusi_p1015-1055.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

獣医学部

目次

一　学部独立前（農学部時代）……1018
二　獣医学部の独立……1024
三　講座増設と学部の充実……1029
四　獣医学部新館建設……1042
五　六年制へ向けて……1048
あとがき……1052
年　表……1053

一　学部独立前（農学部時代）

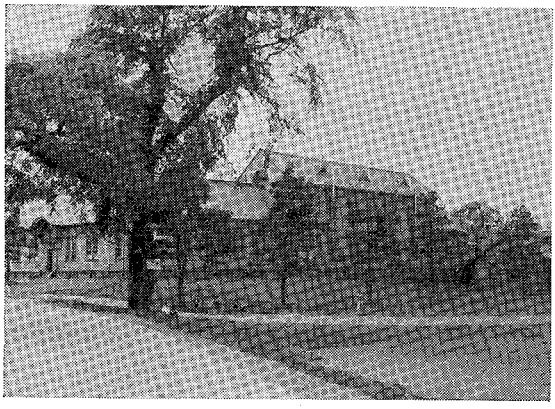
獣医学部は一九五二年（昭和二七）に農学部内の一学科であった獣医学科が分離独立したものであり、札幌農学校初期から続いた長い前史を経ている。この前史そのものも、単に獣医学の講義が学生に課せられていた時代と、初めて専門講座として獣医学講座が設置された一九一〇年（明治四三）以降の時代とに分けることができる。

獣医学の開講は、一八七八年（明治一一）九月、米人ジョン・カッター（John C. Cutter）が札幌農学校教師として来校し、第四年級（実施は一八八〇年より）の獣医学及び実習を担当したことに始まる。カッターは本来医学者であり、農学校で生理学、解剖学、獣医学および英文学を担当するとともに、開拓使の札幌病院顧問としても功績があった。当時日本の獣医学は、なお黎明期にあり、獣医学の近代教育が一八七三年（明治六）四月から陸軍省兵学寮医学舎において始められたばかりであり、一方では札幌農学校とほぼ時を同じくして、一八七八年一月に駒場農学校（東京大学農学部畜産獣医学科の前身）の開校式が行われている。また太政官布告第二八号をもって獣医免許規則が公布されたのが、一八八五年八月二十二日である。

カッターは一八八七年（明治二〇）一月に帰国した。同年三月には駒場農学校出身の須藤義衛門が農学校助教として迎えられ、翌年二月教授となり、一八九一年八月母校帝国大学農科大学の助教授として転任するまで、獣医学その他の課目を担当した。カッター在任中、農学校第二期生の南鷹次郎（のち第二代北海道帝国大学総長）が一八八一年卒業後、駒場農学校で二年間の獣医学研究を終えてもどり、一八八三年以後獣医学を講義している。

須藤の転任後、一八九二年（明治二五）北海道庁技手小圃虎五郎、一八九四年旭川師団二等獣医内藤銅次郎が、それぞれ嘱託講師となっている。

一八九五年四月一日、札幌農学校は文部省直轄時代となったが、翌一八九六年十二月上田半二郎が助教授となり、獣医学の講義が続けられた。上田は一八八九年（明治二二）農芸伝習科第一期卒業生であり、翌年六月札幌で行われた北海道初の獣医開業試験に合格し、またポプラ並木の創始者（一九一二年植樹）として知られている。ついで一九〇五年（明治三八）九月に加藤泰治が講師となった。加藤は一八八九～九二年札幌農学校に在学し、のち米国ミネソタ大学を経て一九〇〇年（明治三三）カナダのマギール大学を卒業して帰国し、北海道庁に籍を置いていた。



農学部旧畜産学科第1部校舎（現在中央図書館の位置）（1956年）
獣医学部独立後は家畜生理学、家畜生化学、家畜薬理学および家畜寄生虫病学講座が使用した。

やがて一九〇七年（明治四〇）九月、札幌農学校は東北帝国大学農科大学となり、農科大学に畜産学科を含む四学科が置かれることとなり、九月十一日に開学式が行われた。さらに、一九一〇年三月二十六日勅令第六八号をもって獣医学講座（家畜内科学講座の前身）が増設され、すでに一九〇七年に助教授となっていた加藤が教授となり、担当した。これよりさき一九〇九年七月、東京帝国大学農科大学から小倉鈆太郎（おぐらこうたろう）が迎えられ、加藤とともに獣医学を担当していたが、一九一一年五月二日獣医学第二講座（家畜外科学講座の前身）が増設されるに及び、小倉がその担当者となり、獣医学講座は獣医学第一講座と改称された。このようにして

東北帝大農科大学畜産学科第2部学科目および授業時間表（1913年）

（『東北帝国大学農科大学一覧』より）

学年	1			2			3		
学期	1	2	3	1	2	3	1	2	3
講義									
畜産学原論	3	3	3	馬学	3	3	3	蜜蜂学	—	—	3
牛学	3	3	3	羊学	3	—	—	家畜衛生学	3	3	3
家畜解剖学及組織学	3	3	3	豚学	—	3	—	獣医警察	—	3	—
				家禽学	—	—	4	病体解剖学	2	1	—
病理通論	2	2	2	家畜飼養学	3	3	2	産科学	1	1	—
薬物学	2	2	—	畜産製造学	3	3	3	眼科学	—	—	2
家畜生理学	3	3	3	内科及疾病学	3	3	3	皮膚病学	—	2	—
生物化学	3	3	3	外科及外科手術学	3	3	3	皮革製造学	3	—	—
応用菌学	2	2	2					遺伝学	2	—	—
経済学	3	3	3	装蹄及蹄病学	—	—	3	作物学	2	2	2
				動物発生学	2	2	—	林学	2	2	3
				寄生学	1	1	—	農業経済学	3	3	3
				土壌学	3	—	—	農政学	3	3	3
				肥料学	—	3	3	法学通論	2	2	2
実験実習									
畜産学演習及実習	—	I	II	畜産学演習及実習	—	—	II	畜産学演習及実習	I	I	I
解剖学実習	II	II	I	畜産製造実習	I	I	—	家畜衛生学実験	I	I	I
家畜生理学実験	I	I	I	病理学実験及実習	I	I	—	病体解剖学実習	不定	不定	不定
応用菌学実験	I	I	I	外科手術学実習	—	I	—	馬匹調教実習	I	I	I
乗馬実習	I	I	I	乗馬実習	I	I	I	病院実習	不定	不定	不定
				装蹄実習	—	—	I	卒業論文			
				調剤実習	I	—	—				
				動物発生学実験	I	I	—				
必修時間数									
講義				講義				講義			
第1、2学期	各18時間			第1、2学期	各19時間			第1学期	9時間		
第3学期	16時間			第3学期	21時間			第2学期	13時間		
								第3学期	11時間		
実験・演習・実習				実験・演習・実習				実験・演習・実習			
各学期	5回			第1、2学期	各4回			各学期	3回		
				第3学期	5回			病院実習	不定		

備考　第1学期　9月11日より翌年1月7日まで
第2学期　1月8日より4月7日まで
第3学期　4月8日より9月10日まで
実験実習のローマ数字は毎週の回数を示す

獣医学教育・研究の基礎が固められるとともに、一九一二年（明治四五）六月二十五日東北帝国大学農科大学家畜病院規程が制定され、札幌及び周辺の家畜診療の中心的存在となったのである。また、この年十月十六日付けをもって、畜産学科卒業生には獣医免許状が下付されるようになり、翌年の卒業生一六名から適用された。

一九一三年（大正二）六月三十日、東北帝国大学農科大学規則の一部を改正し、畜産学科に第一部及び第二部を置き、九月十一日より施行し、第二部では畜産学の他、獣医内・外科学を教えることとなり、一九一四年からは第二部卒業生に対して獣医免許状が下付されるように改められた。当時の学科目及び授業時間数は次表のとおりである。



農学部畜産学科第２部時代の教官と学生（1923年ごろ）
前列向かって左２人目から、小華和、市川、小倉、加藤、葛西、黒沢（初代獣医学部長）、中列左から３人目山極（第２代学部長）、後列左から２人目高畑（第３代学部長）

東北帝国大学農科大学は一九一八年（大正七）四月一日から北海道帝国大学農科大学となり、さらに翌一九一九年四月一日からは農学部・医学部の二学部によって北海道帝国大学が構成されることとなった。

一九二〇年九月に家畜衛生学講座が増設され、東京帝国大学農科大学獣医学科卒業の葛西勝弥が翌年四月から担当した。葛西は一九一二年以来農学実科講師・大学講師を経て助教授となり外国出張中であった。一九二四年教授となり、一九三三年（昭和八）四月北里研究所に移ったが、その後も講師として関係を保っていた。

家畜衛生学講座に続いて一九二二年（大正一一）五月比較病理

北海道帝国大学農学部畜産学科第2部単位表（1935年）

（『北海道帝国大学一覧』より）

科目	単位	科目	単位	科目	単位	科目	単位
比較解剖学	8	産科学	3	農業法律学	4	装蹄実習	1
家畜生理学	6	皮膚科学	1			牛学実習	1
微生物学	6	眼科学	1	比較解剖学実習	4	畜産製造実習	2
医化学	6	家畜衛生学	4	家畜生理学実習	2	馬学実習	1
比較病理学	6	蹄学	2	微生物学実習	2	乗馬実習	不定
病理解剖学	6	畜産学原論	6	医化学実習	1	馬匹調教実習	2
動物発生学	4	家畜飼養学	6	比較病理学実習	2		
寄生動物学	2	馬学	6	病理解剖学実習	2		
薬物学	8	牛学	6	動物発生学実習	2	計	
診断学	2	蜜蜂学	1	寄生動物学実習	1	畜産	48
内科学	6	家禽学	2	薬物学実習	1	獣医	86
内科臨床講義	2	豚学	2	家畜衛生学実習	2	畜産実習	6
外科学	6	羊学	2	診断学実習	1	獣医実習	27
外科手術学	1	畜産製造学	6	内科診療実習	2		
外科臨床講義	2	飼料作物学	1	外科診療実習	2		
伝染病学	4	農業経営学	6	外科手術実習	2		

備考　1.　講義15時間、実習15回45時間を1単位として当時の時間数を単位に換算した

2.　専門教育期間は3年

学講座が増設され、市川厚一が担当することとなった。市川は一九一三年東北帝国大学農科大学畜産学科を卒業後旧制大学院に進み、東京帝国大学医科大学に国内留学し、山極勝三郎教授（病理学）の下で人工タール癌の研究に従事した。一九一九年五月に学士院賞を受賞、その業績は内外に認められている。同年講師となり、助教授を経て一九二五年教授、一九四六年（昭和二一）三月をもって健康を害した理由で辞任した。かくして前記四講座による長い畜産学科第二部時代が続くことになるが、その間、日中戦争を経て第二次世界大戦を経験したのである。

卒業生の数は年によって変動が見られるがしだいに増加していった。大正末期にはほぼ五名前後の卒業生を毎年送り出しているが、その前は一、二名の年が多く、一九二〇年（大正九）には卒業生がなかった。しかし昭和に入ると五～一〇名となり、一九四〇年（昭和一五）以降は毎年一〇～一

五名であった。当時卒業生は国内の教育・研究領域で活躍する者もあり、他方陸軍獣医部（委託生制度があった）に、あるいは満州国にその場を求めることが少なくなかった。学生教育の面はいちおう軌道に乗っていたが、講座数が少ないこともあって、相当の部分は他学部教官の応援に頼らざるを得なかった。参考までに一九三五年（昭和一〇）の単位表を示しておきたい。

比較病理学講座増設後、しばらく講座増設をみなかったが、第二次世界大戦も終わりに近い一九四四年（昭和一九）十二月に、家畜解剖学講座が増設され助教授武野毅二郎が担任し、一九四五年七月山極三郎を経て、翌年十二月から高畑倉彦が担任することとなった。終戦後大学そのものに大きな変化が起ったが、同時に畜産学科も次に述べるように変わっていき、それはある意味で学部独立前の胎動とみることもできる。

一九四六年（昭和二一）四月一日をもって、畜産学科第一部および第二部が合併して畜産学科となり、翌一九四七年九月三十日には政令第二〇四号によって北海道帝国大学は北海道大学と改められた（実施十月一日）。北海道大学になってから、一九四九年四月畜産学科は再度獣医学科と畜産学科に二分された。一方この年九月二日の農学部教授会に獣医学部分離案が提出可決され、獣医学部独立の歩みが始まったのであるが、その間の事情は後述される。

翌一九五〇年四月には家畜生理学講座が増設され、翌年七月から医学部出身の本間慶蔵の担任となった。このように獣医学部独立前には、獣医学第一、獣医学第二、家畜衛生学、比較病理学、家畜解剖学及び家畜生理学講座の計六講座が、農学部内に準備されていたのである。

ここで旧制の学位に関して簡単に触れておく必要がある。一八九八年（明治三一）十二月公布（勅令第三四四号）の学位令による獣医学博士は、須藤義衛門、小倉鉀太郎、市川厚一および加藤泰治に授与されているが、その前の一八八七年（明治二〇）勅令第一三号による学位令には獣医学博士は含まれていなかった。一九二〇年（大正九）七月勅令

第二〇〇号による学位令に基づいて、北海道帝国大学学位規程が翌年三月二十二日制定され、これによる第一号獣医学博士は、一九二二年九月に右田百太郎に授与されている。

二　獣医学部の独立

獣医学部独立への動きは一九四九年（昭和二四）夏ごろに始まったが、中心になったのは平戸勝七（家畜衛生学講座）であり、当時農学部長は島善鄰であった。独立の動機は単純でなかったと思われるが、最大のものは第二次世界大戦後の国内情勢にあった。占領軍の日本進駐とともにGHQ内にPHW（公衆衛生福祉局）が置かれ、米軍獣医将校や獣医師が各地に派遣され、日本における公衆衛生とくに食品衛生及び獣医学教育についての検討や指導が開始された。それまでの獣医学は家畜に限られ、中でも馬が中心になる傾向が強く、米国流の獣医学とはやや異質のものであり、早急に切替を実施するには当然大きな困難が横たわっていた。

札幌市では北三条西三丁目の大同ビル内にPHWが置かれていたが、一九四八年春、獣医担当官にそれまでのマーゲンス（H.J. Magens）に代わり、民間出身の若いバーングローバー（Burngrover）になってから、急に積極的な働きかけがなされるようになった。彼は二十代であり、農学部畜産学科を足しげく訪れ、一方では北海道内の各地を査察し、いたるところで旋風を巻き起こしていった。当時の畜産学科は一九一〇年（明治四三）あるいは一九一四年（大正三）ごろ建設の老朽校舎を使用していた関係もあって、施設面や対学生教育体系などの改善を要求され、できないならば廃校との線をも持ち出されるようになった。事実一九四九年五月十日には、島農学部長に、「畜産学科が考え

を改めないならば閉鎖を命ぜられるだろう」と実際に宣言されるまでになった。平戸はこの間の事情を次のように述べている。

占領時代のこのような一コマは征服者と被征服者との関係で避け難い出来事であったと思う。東京に居た恩師葛西先生から〝コロラドの山ザルにかきまわされるようでは情ないぞ〟という激励も飛んで来たわけであるが、この禍を転じて福となすためには、最早や農学部の中の学科という立場では如何ともし難く、既成概念の確立している古く封建的農学部の殻の中から早く飛び出し度いという気持が強く燃え上るのを禁じ得なかった。昭和二十四年の盛夏の頃のある夜、島農学部長の宅を訪問して（山極教授と共に）ざっくばらんに獣医学部の独立を御相談申上げた処、〝獣医は家畜衛生のほかに公衆衛生の領域が大きく開けたのだから従来の考えで獣医を農学の中にとじこめておくのはよくない。独立した学部を創って高い専門教育に徹すべきである〟というまことに我意を得た力強い激励を頂き、百万の味方を得たような勇気が湧いた。

（『創立一〇周年記念北海道大学獣医学部史』、一九六三年）

かくして同年九月二日の農学部教授会において獣医学部分離案が可決されたのである。

このころから、北海道獣医師会、農業諸団体、同窓生などによる期成運動が活発化し、本格的な軌道に乗ったのが一九五一年（昭和二六）の夏であり、この年七月には獣医学部設置期成会が結成された。その前年十月二十五日をもって伊藤誠哉学長がイールズ事件により辞任し、島農学部長が学長になっていた。北海道大学獣医学部設置期成会が作成した獣医学部設置に関する陳情書（一九五一年七月付）によれば、新設講座として公衆衛生学講座（一九五二年度には緊急設置のこと）、家畜薬理学講座、家畜生化学講座、家畜寄生虫病学講座（将来増設のもの）を挙げ、獣医学部に昇格のための必要経費として、人件費一三〇万円、施設費六三三万円、計七六三万円、などとなっている。期成会の顔ぶれは、黒沢酉蔵、東隆、太田信吉、高橋雄之助ら七名に札幌同窓会及びクロバー会（畜産・獣医両学科同窓会）が加わり、会長は北海道農業共済組合連合会会長の山中良造となっている。またこのほかに北海道畜産推進協議会メン

バー二七名が名を連らねている。

前記のように、当初は既設六講座と合わせて一〇講座とする計画であった。しかし、度重なる文部省関係部局に対する陳情の継続中に、当時の春山順之輔大学課長の理解と推進により、講座増設を学年進行に持ち込み、当初案に家畜伝染病学講座及び家畜臨床繁殖学講座を加えた一二講座案に修正されたのである。またこの間、倶知安出身の小川原政信代議士の協力があったことを、平戸は次のように述べている。

党の長老である小川原さんの熱意と誠実さは文部、大蔵の上層部に徹底した獣医学部ムードを盛上げずにはおかなかった。（中略）二十六年も秋が深まると共に小川原さんも一層関係方面に拍車をかけ、当時大きな損害をうけている伝貧の征伐には獣医学部を造ってよい教育をやる位の心がけが必要であることを一つの論点とされたことなども思い出される。

（『創立一〇周年記念北海道大学獣医学部史』、一九六三年）

学部設置理由として家畜衛生及び公衆衛生の重要性が前面に打ち出されていたが、家畜衛生関係ではとくに馬の伝染性貧血症（伝貧）が強調されていた。第二次世界大戦以前は北海道は馬産の中心地であり、大正末期からは常に二〇万頭以上三〇万頭近い頭数を誇っていた。農業、輸送、軍用などに需要が大きかったからで、当然獣医学も馬中心であり、牛は徐々に増加してはいたが多くとも八万頭台にすぎなく、戦後一九六五年（昭和四〇）を境に牛が三〇万頭台を越え、馬が二〇万頭台を割ったのである。馬産上多くの重要疾患があったが、中でも伝貧は猛威をふるい一九五〇～五二年には年間四〇〇〇頭以上発生し、すべて法令殺処分となっていたのである。

一九五一年（昭和二六）十二月二十九日に至り、大蔵省より獣医学部設置の内示があった。ついで翌一九五二年二月十七日大学設置審議会総会において獣医学部案を承認し、獣医学部設置が確定した。また二月二十二日朝のラジオ放送（NHK第一）も、北海道大学にわが国初の獣医学部が創設される旨を報じた。一月二十日付けの『北海道大学

新聞』は、「獣医学部設立内定す」の見出しで次のように報じている。

本学農学部獣医学科では一昨年獣医学部設立期成会を作り昇格運動をつづけていたが、このほど文部省より承認され、今時国会の通過を待つことになった。これにかんして島学長は『九分九厘までは大丈夫』といっているが、事務は当分農学部に委任して行うなどその拡充強化は早急には困難とみられている。現在の獣医学科は大正二年誕生その後馬伝染性貧血病、馬流産などの画期的な研究をはじめ故市川博士の世界最初の人工ガンなど四十年の歴史に輝くが、教育面が機構上軽視される憾みがあった点が指摘され、独立の学部として飛躍的な発展が要望されるにいたったもの。

以上のような経過で三月三十一日法律第二二号をもって農学部獣医学科は獣医学部に昇格したのである（四月一日実施）。四月一日、獣医学部に家畜内科学、家畜外科学、家畜衛生学、比較病理学、家畜解剖学、家畜生理学及び獣医公衆衛生学講座を置き、学科を獣医学科と定めた。また獣医学第一及び獣医学第二講座は、それぞれ家畜内科学及び家畜外科学講座と改められた。ついで北海道大学獣医学部規程は九月三十日海大達第三六号をもって定められた（適用四月一日）。学科目単位表は次頁の表のとおりである。

学部創設と同時に学部紀要の発行が検討され、六月五日教授会において五万円の予算で創刊号（B五判）を発行する計画が可決された。その結果、年四回発行、邦文（欧文抄録）の『獣医学研究（Veterinary Research）』第一巻第一号（五九ページ）が翌一九五三年（昭和二八）一月三十一日に発行された。本誌は、第二巻からは欧文誌 The Japanese Journal of Veterinary Research となり、一九七六年までに第二四巻を発行し、その間特別号（Supplement）が四回発行された。紀要創刊事情の一端について、長く編集委員長であった三浦四郎（家畜伝染病学）は次のように述べている。

当時は、原稿を送っても、それが活字になるには一年か、それ以上の時間がかかり、その上、超過料金とか別刷代を合わせると二万や三万の金は訳もなくけし飛ぶ有様であった。各教室に配分される研究費の総額が不足であるばかりか、超過料金や

北海道大学獣医学部獣医学科単位表（1952年）

（『北海道大学一覧』より）

	学科目	講義 2	講義 3 Ⅰ	講義 3 Ⅱ	講義 4 Ⅰ	講義 4 Ⅱ	実習 2 Ⅱ	実習 3 Ⅰ	実習 3 Ⅱ	実習 4 Ⅰ	実習 4 Ⅱ	単位 講義	単位 実習	単位 計	備考
必修科目	家畜解剖学	4	2	2								8		8	（含組織発生学）
	家畜生理学	2	2	2								6		6	
	家畜微生物学		2	2								4		4	
	家畜病理学		1	1	2	2						6		6	
	家畜薬理学			2	2							4		4	
	家畜医化学	2	2									4		4	
	家畜内科学		2	2	2							6		6	（含診断及皮膚病）
	家畜伝染病学			2	1							3		3	
	家畜外科学		2	2	1							5		5	（含蹄病眼科）
	家畜臨床繁殖学				2	2						4		4	
	獣医公衆衛生学				2	2						4		4	
	家畜衛生学				2							2		2	
	家畜寄生虫病学		1	2								3		3	
	畜産学	2	2									4		4	
	家畜解剖学実習						2	1	1				4	4	（含組織発生学実習）
	家畜生理学実習						1	1					2	2	
	家畜微生物学実習							1	1				2	2	
	家畜病理学実習							1	1	1	1		4	4	
	家畜薬理学実習								1	1			2	2	
	家畜医化学実習						1	1					2	2	
	獣医公衆衛生学実習									1	1		2	2	
	家畜内科学実習							1		1	2		4	4	（含診断実習）
	家畜外科学実習								1	2	1		4	4	（含外科手術）
	家畜寄生虫病学実習										1		1	1	
	計	10	16	17	14	6	4	6	5	6	6	63	27	90	
選択科目	家畜育種学		2	1								3		3	①選択科目は10単位以上履修するものとする。
	乳製品製造学				1	2						3		3	
	肉製品製造学				2	1						3		3	
	家畜飼料学				2							2		2	
	家畜栄養学					2						2		2	②牧場実習は夏期休暇中1週間の実習を以て1単位とする。
	推計学					2						2		2	
	乳製品製造学実習										1		1	1	
	肉製品製造学実習									1			1	1	
	牧場実習														
	計		2	1	5	7				1	1	15	2	17	

別刷代に向けられる費目がないため、校費以外に豊富な研究費を持つ教室は別として、教室の業績を誌上に発表すること自体が困難な時代であったから、紀要の発刊にはその様な経済的事情を打破する意図も含まれていたものと思われる。

（『創立一〇周年記念北海道大学獣医学部史』、一九六三年）

三　講座増設と学部の充実

学部創設に際し、獣医公衆衛生学講座が新設されて七講座となったが、その後年を追って六講座が加えられた。各講座の創設時からの担当者（農学部時代及び兼担を含む）、担当年月日を次に示す。また各講座における主要研究テーマを、一九六二年（昭和三七）当時のもの（イ）、及び最近のもの（ロ）に分けて紹介する（イは『創立一〇周年記念北海道大学獣医学部史』より）。イ・ロ間に変遷が見られ、近年は電子顕微鏡学的研究（透過及び走査）が各領域においてとり入れられており、対象も基礎的研究の充実があり、人獣共通疾患をはじめ比較医学的領域の業績が増加しつつある。

家畜内科学講座　一九一〇年（明治四三）三月二十六日創設、最初は獣医学講座、後に獣医学第一講座、家畜内科学講座と改称。

加藤　泰治　一九一〇年七月三十日
小華和忠士　一九二三年三月二十九日
黒澤　亮助　一九二六年二月二十七日
小華和忠士　一九二八年五月七日
小倉鉀太郎・小華和忠士　一九三〇年四月三十日

小華和忠士　一九三〇年五月七日
中村　良一　一九五二年四月一日
大屋　正二　一九六〇年四月一日
波岡　茂郎　一九七四年四月一日
イ1　反芻獣の腹水症に関する実験的研究
2　家畜血液細胞の電子顕微鏡学的研究
3　家畜血清蛋白質の電気泳動学的研究
ロ1　豚の周産期医学に関する研究
2　豚の消化生理に関する研究
3　小動物の貧血発生機序に関する研究

家畜外科学講座　一九一一年（明治四四）五月二日獣医学第二講座として創設、後家畜外科学講座と改称。

小倉鉀太郎　一九一一年七月二十二日
市川　厚一・小華和忠士　一九三〇年五月一日
黒澤　亮助　一九三二年四月二十三日
酒井　保　一九五五年四月一日
イ1　家畜の腱の附着に関する研究
2　犬のモルヒネ麻酔に関する研究
3　犬の骨折に対する挿桿法に関する基礎的研究
4　第一胃運動に及ぼす前胃切開手術の影響に関する研究
ロ1　犬の可移植性肉腫の細胞性免疫に関する研究
2　外科家畜の輸液に関する研究

3　犬の腸閉塞症に関する研究
4　犬のリンパ管造影法に関する研究

家畜衛生学講座　一九二〇年（大正九）九月十四日創設。
小倉鉀太部・高松正信・加藤泰治　一九二〇年十月二十九日
葛西　勝弥　一九二一年四月十日
葛西　勝弥・高田幸二・平戸勝七　一九三三年十一月十五日
平戸　勝七　一九三七年三月二十五日
市川　厚一・浜田　輔一　一九四一年九月二十六日
平戸　勝七　一九四六年十月十五日
三浦　四郎　一九六四年十二月二十日
梁川　良　一九六五年四月一日
イ1　馬伝染性貧血に関する研究
2　犬伝染性肝炎に関する研究
3　トキソプラズマ症に関する研究
4　リステリア症に関する研究
5　レプトスピラ症に関する研究
ロ1　レプトスピラ症に関する研究
2　牛腎盂腎炎菌の生物学的研究
3　家畜・家禽および野鳥のインフルエンザに関する研究
4　ミンクの出血性肺炎に関する研究

比較病理学講座　一九二二年（大正一一）五月十五日創設。

市川　厚一　一九二二年六月十五日
黒澤　亮助　一九二三年四月三十日
市川　厚一　一九二五年八月三日
山極　三郎　一九四七年三月十日
藤本　胖（ゆたか）　一九六二年一月十一日

イ1　家畜白血病（家鶏を含む）に関する病理学的研究
2　馬伝染性貧血に関する病理学的研究
3　家畜の骨疾患に関する病理学的研究
4　家畜の中枢神経系に関する病理学的研究
5　家畜の末梢神経系に関する病理学的研究
6　家畜の繁殖障碍に関する病理学的研究
7　ミンク疾病に関する病理学的研究

ロ1　家畜のウィルス性腫瘍に関する研究（免疫抑制によるマレック病の病理発生に及ぼす影響、ＪＭＶ・ＭＤ腫瘍、ＭＤＶ及びＨＶＴの形態発生、その他）
2　内分泌腺の細胞病理学的研究（上皮小体及び膵）
3　動物の神経系疾患に関する病理学的研究（馬・猫の腰萎、馬のＸ大腸炎、仔馬筋変性症、その他）

家畜解剖学講座　一九四四年（昭和一九）十二月十九日創設。

武野毅二郎　一九四四年十二月十九日
山極　三郎　一九四五年七月十六日
高畑　倉彦　一九四六年十二月二十七日
工藤　宣夫　一九六四年四月一日

イ1　腎脈管構築の比較解剖学的研究

2　リンパ節の細胞学的、細胞化学的研究
3　山羊赤色リンパ節の細胞学的、細胞化学的研究
4　羊、牛赤色リンパ節の組織学的研究
5　家畜の内頸動脈洞の組織学的研究
ロ1　生殖器脈管系の比較解剖学的研究
2　鳥類免疫系の実験形態学的研究
3　リンパ組織の比較解剖学的研究
4　鳥類副生殖器、退化交尾器の実験形態学的研究

家畜生理学講座　一九五〇年（昭和二五）四月一日創設。

山極　三郎　一九五〇年四月一日
本間　慶蔵　一九五一年七月一日
菅野　富夫　一九六九年三月一日

イ1　中枢神経系のカリウムとナトリウムの交換に関する研究
2　動物の活動性の周期的変化とその“Zeitgeber”に関する研究
3　ストレスに際し生体内に変動するX物質に関する研究
4　動物の体温調節機構に関する研究
ロ1　膵臓の分泌機構に関する研究
2　副腎髄質の分泌機構に関する研究

獣医公衆衛生学講座　一九五二年（昭和二七）四月一日創設。

浜田　輔一　一九五二年四月一日

イ1　畜産食品に含まれる大腸菌群および腸球菌群に関する衛生学的研究、特に汚染指標としての意義について

2　食品に含まれる芽胞形成桿菌に関する衛生学的研究
3　獣肉、卵およびかきにおける微量拡散分析法による鮮度検査の検討
4　家禽のサルモネラ症に関する研究
5　コアグラーゼテストを基盤としたブドウ球菌の生物学的型別
ロ1　エンテロトキシン原性黄色ブドウ球菌の生態学的研究
2　Yersinia enterocolitica の生態学的および細菌学的研究
3　ウィルス性人獣共通伝染病の生態学的研究

家畜生化学講座　一九五三年（昭和二八）四月一日創設。

伊藤　時哉　一九五三年四月一日
羽賀　正　一九五八年十月一日
久保周一郎　一九六七年八月一日
イ1　豚の浮腫病に関する研究
2　溶血性大腸菌に関する研究
3　ボツリヌス毒素に関する研究
ロ1　酸性アデニレートキナーゼの構造と機能及び細胞内分布について
2　細胞表面抗原の化学構造とこれを認識する抗体の免疫化学
3　ボツリヌスC型毒素の構造と機能
4　筋収縮性蛋白質ミオシンの比較生化学

家畜伝染病学講座　一九五三年（昭和二八）四月一日創設。

三浦　四郎　一九五三年五月一日
梁川　良　一九七三年四月一一日

イ1　豚の浮腫病の原因学的研究
　2　家畜および家禽のサルモネラ症に関する研究
　3　家畜および家禽の大腸菌感染に関する研究
　4　家禽ビブリオ病に関する研究
　5　鶏ブドウ球菌症に関する研究
　6　ヨーネ病に関する研究
　7　鶏の各種疾病に関する研究
ロ1　マレック病ウィルスの発癌機序
　2　七面鳥ヘルペスウィルスの発癌阻止機序
　3　ウシ白血病のウィルス学的・疫学的研究
　4　鳥類パラミキソウィルスの疫学
　5　動物のサルモネラ感染症とその疫学

家畜薬理学講座　一九五四年（昭和二九）四月一日創設。

大賀（おおが）　皓（あきら）　一九五四年四月一日

イ1　羊の胃運動に関する研究（特に第三胃に関して）
　2　反芻獣の胃に関する薬理学的研究（コリン透導体およびアドレナリン類似体の作用の比較、Ach および Adrenaline の作用）
　3　羊の胃の神経支配に関する研究
　4　羊の胃における receptor に関する研究
　5　羊における反芻および胃運動の中枢調整に関する研究
ロ1　非アドレナリン作働性抑制神経の伝達物質の追及
　2　平滑筋活性と物質代謝および電気特性との相関

3　化学伝達物質放出に関するイオン背景
4　中枢神経におけるシナプス形成

家畜臨床繁殖学講座　一九五四年（昭和二九）四月一日創設。

石川　恒　一九五四年四月一日
イ1　雄家畜の不姙性に関する研究
2　精子の乾燥に関する研究
3　ミンクの人工授精に関する研究
4　牛の雌性生殖器および内分泌腺の病理組織学的並びに組織化学的研究
ロ1　精子の微細構造および精上皮サイクルの細胞学的研究
2　心電図、ドップラーを用いた乳牛・豚の姙娠・分娩に伴う生理変化に関する研究
3　先天異常に関する細胞遺伝学的研究

家畜寄生虫病学講座　一九五五年（昭和三〇）七月一日創設。

山下　次郎　一九五五年七月一日
藤本　胖　一九七五年五月一日
大林　正士　一九七五年十二月一日
イ1　包虫の生理学的研究、特に多房性包虫の生体外飼育
2　多房性包虫症の治療に関する研究
3　日本における寄生蠕虫相に関する研究
4　霊長類における蠕虫学的研究
5　馬ストロンギルス症に関する研究
6　帯状嚢虫に関する研究

ロ1　包条虫類に関する病理学的・免疫学的研究
　2　広東住血線虫およびコスタリカ住血線虫に関する研究、とくに系統論および免疫学
　3　広節裂頭条虫および近縁種に関する研究
　4　小哺乳類とくに食虫目の寄生虫相に関する研究
　5　ニッポストロンギルスおよびオリエントストロンギルスに関する比較寄生虫学的研究

獣医放射線学講座　一九六九年（昭和四四）五月二十一日創設。

吉井　義一　一九六九年六月一日
ロ1　電離放射線による核たんぱく質（クロマチン）の損傷機構
　2　放射線増成作用の研究
　3　環境放射能の高度生物への危険度

以上のように、当初計画の一二講座に続いて、獣医放射線学講座が加わり、計一三講座が現在の状態である。次に学部創設以来の歴代学部長と、その任期一覧を示しておく。

黒澤　亮助　一九五二年四月一日～五五年三月三十一日
山極　三郎　一九五五年四月一日～六二年一月九日
高畑　倉彦　一九六二年一月十日～六四年一月九日
山下　次郎　一九六四年一月十日～六六年一月九日
浜田　輔一　一九六六年一月十日～六八年一月九日
山下　次郎　一九六八年一月十日～七二年一月九日
三浦　四郎　一九七二年一月十日～七三年三月三十一日
酒井　保　一九七三年四月一日～七五年三月三十一日
酒井　保　一九七五年四月一日～七六年四月三十日（事務取扱）

工藤　宣夫　一九七六年五月一日～

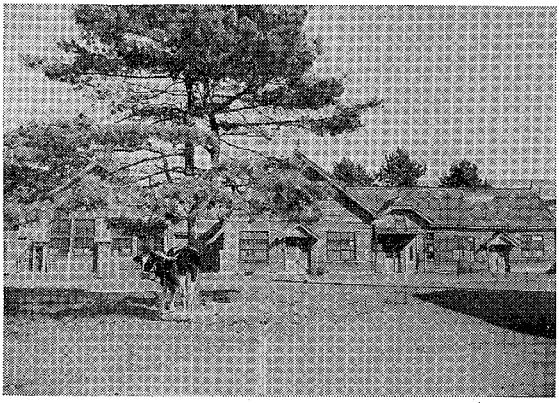
学部独立の三年前、一九四九年（昭和二四）に新制大学学生の入学式が行われていたが、一九五三年三月二十五日に旧制最終及び新制最初の卒業式が行われて、それぞれ二四及び九名の農学部獣医学科学生が巣立った。結局、独立前の農科大学及び農学部の畜産学科第二部（一時一部・二部合併）・獣医学科に在籍して卒業した学生数は、合計四五二名に達した。最初の獣医学部学生二三名の卒業式は、一九五五年（昭和三〇）三月二十五日行われ、独立後一九七六年（昭和五一）までの卒業生数は七二〇名である。その間毎年の卒業生の数は一三～四五名であり、とくに近年は教養部からの移行に際し難度の高い方の学部に属するようになり、常に定員四〇名の線が続いている。

一九五三年（昭和二八）三月二十六日、法律第二五号をもって北海道大学に新制大学院を設置することになり（施行四月一日）、五月十一日最初の入学式が行われ、さらに五月十三日文部省告示第四一号に基づき、大学院獣医学研究科には予防治療学専攻及び形態機能学専攻を含むことが決まり、修士・博士課程が定められた。修士課程最初の卒業式は、二年後の一九五五年三月二十五日に挙行され、予防治療学専攻四名、形態機能学専攻二名であり、博士課程の場合は、一九五八年九月三十日形態機能学専攻二名であった。また一九七六年（昭和五一）までの卒業生数は、修士課程予防治療学専攻八九名、同形態機能学専攻八三名、計一七二名、博士課程予防治療学専攻七名、同形態機能学専攻一四名、計二一名である。

一九四九年（昭和二四）六月一日、新しい獣医師法が法律第一八六号をもって公布された。その結果、一九五三年から始まる新制大学の卒業者は、国家試験に合格しなければ新制獣医師免許を得ることができなくなった。国家試験（東北・北海道地区）そのものは第一回一九五〇年一月十七～二十日北海道大学で、第二回も翌年三月十五、十六日同所で行われた。当初会場に盛岡市も含まれていた。現在は札幌市、江別市、帯広市において北海道地区の試験が交互

に実施されている。第四回一九五三年（昭和二八）以降は前述のように義務付けられたが、それ以前にも北大生の自主参加が見られている。

学部紀要発行部数は、当初四〇〇部であったが、しだいに増加し、現在六五〇部となった。近年の悩みの一つは刊行費の高騰であり、一九七六年度（昭和五一）の予定は約一四〇万円を要し、そのうち、約五〇万円は紀要委員会扱いとなり、残りは執筆者負担となる。しかし一方では多くの利点もあり、その一つとして内外諸機関との印刷物交換があげられる。参考までに一九六二年度（昭和三七）と一九七五年度（昭和五〇）における学部蔵書数と雑誌類種類数



旧家畜病院（1962年10月）

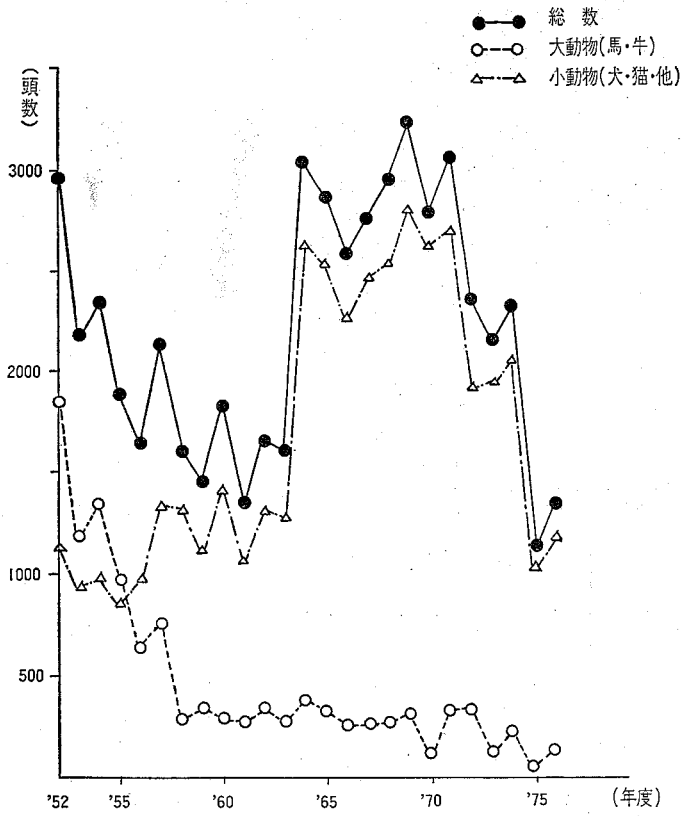
蔵書数

年度	邦書	欧書	計
1962	1,518	1,735	3,253
1975	6,979	13,534	20,513

雑誌種類数

年度		購入	交換・寄贈	計
1962	邦文	54	32	86
	欧文	96	123	219
	計	150	155	305
1975	邦文	55	158	213
	欧文	140	186	326
	計	195	344	539

家畜病院患畜数の推移



を前表に示す。これにより交換・寄贈数の増加が理解できる。

附属家畜病院について以下に概要を述べておく。東北帝国大学農科大学時代一九一二年（明治四五）六月二十五日附属家畜病院規定が制定されていたが、一九五三年（昭和二八）七月二十八日法律第八八号をもって獣医学部に家畜病院が設置され（八月一日施行）、全面的に改められた北海道大学獣医学部附属家畜病院規程は、一九六一年（昭和三六）十一月二十七日に制定された（十二月一日施行）。従来附属家畜病院の担当教官はすべて兼担であったが、一九六七年（昭和四二）四月一日をもって初めて専任教官助手の席がつくこととな

り、その後一九七三年（昭和四八）四月一日助教授に振り替えられている。

家畜病院の歴史を振り返ってみると、かつては訪れる患畜はほぼ大動物それも馬が主体であった。しかし第二次世界大戦終了後はその様相がしだいに変化し、大動物の対象は牛中心に移り、大動物自体が減少を示し、逆に犬・猫などのペット小動物が中心になってきた。統計上、大動物・小動物数逆転の時期は、おおむね一九五五年（昭和三〇）である。また一九六四年（昭和三九）に後述のように新しい附属家畜病院の完成を見たが、そのころから患畜数は急激に増加した。かかる現象は、農村機械化、自動車文化と都市化の波、酪農振興、その他多くの要因によるものといえる。ちなみに患畜数の年間最高数は、一九六九年（昭和四四）における三二二六である（前図参照）。

官制が布かれる前の附属家畜病院は、農学部の単なる付属施設にすぎなかった。したがって責任者である家畜病院長は、一九五四年（昭和二九）以降に任命され、それ以前は主任と称していた。学部独立前後からの歴代病院主任及び病院長とその在任期間は次のとおりである。

病院主任

黒沢　亮助　一九四一年四月一日～五四年三月三十一日

病院長

中村　良一　一九五四年三月三十一日～五九年八月十日

酒井　保　一九五九年八月十日～六五年八月九日

大屋　正二　一九六五年八月十日～六九年八月九日

藤本　胖　一九六九年八月十日～七三年八月九日

石川　恒　一九七三年八月十日～

獣医学部あるいは各講座が主催した学会の全国あるいは支部大会がある。前者の中で、日本獣医学会は二回ある。

すなわち、第三八回大会は、一九五四年（昭和二九）九月十、十一日に黒沢亮助を会長として、当時の中央講堂を会場に開催され、演題数七三を数えた。次は一九六八年（昭和四三）八月二十六～二十八日、教養部校舎で行われた第六六回大会である。この時は会長三浦四郎で、三会場に分かれて一般講演題数が二二六に達した。

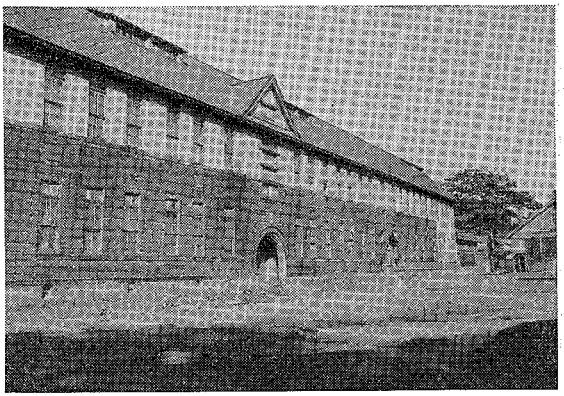
四　獣医学部新館建設

一九六二年（昭和三七）一月十二日、教授会において獣医学部創立十周年に当たり記念式典、記念事業を行うことが提案採択された。その結果、九月二十八日十時半からクラーク記念会館講堂において記念式典が内外二三一名参集の下に挙行され、祝賀パーティーは同じく二階集会室において十二時半から開かれた。そのほかに一般講演会及び学術映画会（九月二十八日）、学術講演会（十月一日）、記念出版、学部開放（十一月初旬）、記念運動会、記念事業が組み込まれた。記念事業の中には標本館整備その他があり、学部新館建設促進強化も含まれている。そのことは記念出版『創立一〇周年記念北海道大学獣医学部史』に、当時の高畑倉彦学部長が、「学部将来構想私見」と題して詳述しているが、その一部を引用することとする。

ましてやこれらをいれる建物においては一部は陳旧倒壊寸前の木造建築、他は農学部長管理下の建造物に鮨詰状態で間借りしている有様である。形而上的意義における各自の内容は充実しているが、現実の具体的外観は実に無残なかぎりである。わが学部の内容実績を知るものはともあれ、いたずらに機構の小、外観の貧をもって鼎の軽重を問う識者の少なくない事は誠に残念である。（中略）

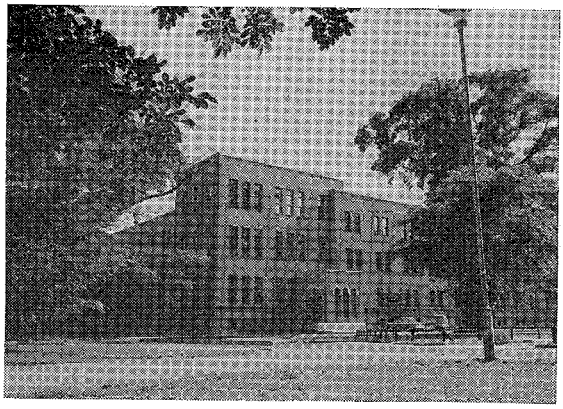
その故に昭和三四年北大獣医学部建築期成会なるものが関係各界の代表者達によって結成され、建物実現に努力中である。学部内でも三七年三月学部建築委員会五名を教授会メンバーから選出し、之に学部長と事務長が加わり、実現方について期成会事務局と協力して努力中である。三五年度は学内順位二〇番、三六年度は一二番、三七年度はともかくも二七〇坪の家畜病院予算が文部省議は通ったが、大蔵省で消えてしまったとの事である。三八年度は概算要求としては獣医学部として三〇〇〇坪余を要求し、第一期計画として家畜病院、臨床三講座、学生実習室等を合して一〇三八坪を要求している。

旧校舎は北大正門を入ってクラーク像に至る途中、林学講堂の手前、現在の中央図書館の位置北九条西七丁目にあり、道路に面して畜産学科第一部、奥に畜産学科第二部と家畜病院とがあり、林学講堂との間に斜めに理学部方面の中央道路に抜ける道があった。校舎の建設は一九一〇年（明治四三）五月にさかのぼり、さらに一九一四年（大正三）八月に増築されていた。一部ガス燈部品の残る建物で、時代柄豊富に木材を使用してはあったが、老朽である上近代機器使用に伴う電力量増加などにより、きわめて危険な状態であった。さらに学部独立による講座増加が原因で狭隘この上もなかった。このような事情から独立時すでに新館の必要性が切迫した問題として叫ばれていたのである。



獣医学部旧校舎（1962年10月）

北海道大学獣医学部新館建設期成会は、一九五九年（昭和三四）一月二十八日の設立総会によって結成されたが、このことは前年度学部同窓会総会において議決推進されていた。会長には当時酪農学園理事長の黒沢酉蔵が就任し、北海道獣医師会、諸農業団体、会社、道衛生部・農務部など五一団体が参加し、これに獣医学部同窓会が加わった。学部同窓会はすでに



農学部南東棟（1962年９月）
1959年より、基礎系６講座および事務室、図書室が使用した。

一九五七年（昭和三二）五月二十五日に発会していた。期成運動経過は毎年同窓会報誌上に報告されている。運動資金は初年度約一三万円、以後年を追って約一五万円、二〇万円と寄せられたが、同窓会はそれぞれ三万円、五万円、七万円と負担していった。

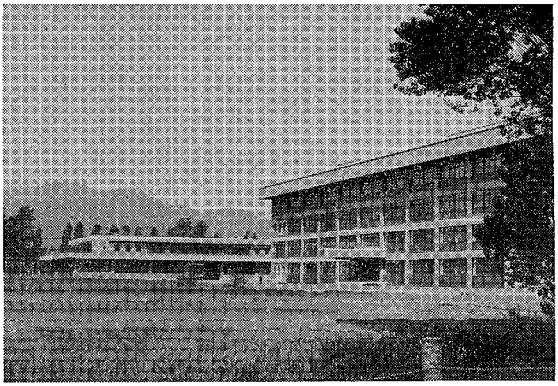
期成会結成が一九五九年に行われた理由は単純ではないが、校舎の老朽・狭隘と同時に、講座の分散が挙げられる。すなわち、北大内の建設計画の一つとして、農学部新築工事が獣医学部独立前後から毎年行われていた。農学部本館そのものは一九三五年（昭和一〇）に落成していたが、当時の計画がなお残っていて、畜産学科第二部時代四講座分が設計に含まれていたのである。その間旧畜産学科第一部である畜産学科が新館に移った跡を、家畜生理学、家畜生化学、家畜薬理学及び家畜寄生虫病学講座が使用していた。ところが、農学部の新築された南東側を獣医学部が使用することになり、一九五九年（昭和三四）五月二十七日家畜生理学、家畜薬理学、家畜生化学及び家畜寄生虫病学講座が移転し、翌一九六〇年四月十八日に比較病理学講座、同七月十三日には家畜衛生学、家畜解剖学、獣医公衆衛生学及び家畜伝染病学講座、事務室、図書室が移転した。臨床関係講座はなお残り、同九月十五日に家畜内科学講座は家畜衛生学及び家畜伝染病学講座研究室跡に、家畜外科学講座は図書室、事務室、家畜衛生学及び家畜伝染病学講座教官室、家畜臨床繁殖学講座研究室跡に、家畜臨床繁殖学講座は家畜解剖学講座、電子顕微鏡室、組織培養室跡にそれぞれ移転した。その結果臨床と基礎関係講座が遠く離れてしまい、後者も四講座分のスペースを九講座

が使用する状態になったのである。しかも一方では、中央図書館の新建設の一端が学部移転開始の前年から始まっており、将来法文系学部の建物も図書館を中心に建てられる構想になっていた。したがって、ひとまず落ち着いた家畜病院と臨床諸講座も遠からずほかに移らざるを得ない見通しであった。

期成会結成初年度（一九五九年）、新館建設案として、敷地約九〇〇〇坪、建物総計三二八四・一三坪、総工費三億二八四二万円を目標とし、文部省あて北大の概算要求に割り込ませることができたが、一四中一一位であり、期成会長、学部長らが上京し働きかけを開始したのである。

一九六〇年（昭和三五）三月十六日付け『北海道大学新聞』に「北大十カ年計画」が報道された。当時は杉野目晴貞学長時代であるが、新築、増築、改築の具体案で本建築の必要なもの二〇万二二九〇平方メートル、六一億三〇〇〇万円分を一〇カ年で完成しようとする計画であった。その中に獣医学部も組み込まれ、面積は七五九〇平方メートルとされた。この年七月に、翌年度の国立文教施設整備予定が評議会に諮られ、獣医学部の一部新営工事（家畜病院）は一二件中第八位で文部省に提出されたが、日の目を見なかった。当時は理工ブームの最中であり、上位に位置することはなかなか困難であった。しかし計画では敷地として前年に第一農場用地西側約八〇〇〇坪が予定され、さらに三五〇〇坪が追加された。

一九六一年（昭和三六）期成運動に小樽出身の椎熊三郎衆議院議員の協力が得られ、しだいに運動に熱が入っていった。計画として新館建設を五カ年とし、一年分約六〇〇坪、六〇〇〇万円を要求していた。しかし獲得方法としてもっと短期間にすべきであるとの意見になり、三カ年分割要求に落ち着き、以後は第一年度要求が家畜病院関係九〇八・一〇五坪となった。九月上旬獣医学部要求分が文部省議を通過したことが学長から内報されたが、それも二六〇坪、二七一五万円に削減され、しかも大蔵省議は通過しなかった。



獣医学部本館および附属家畜病院（1966年6月）

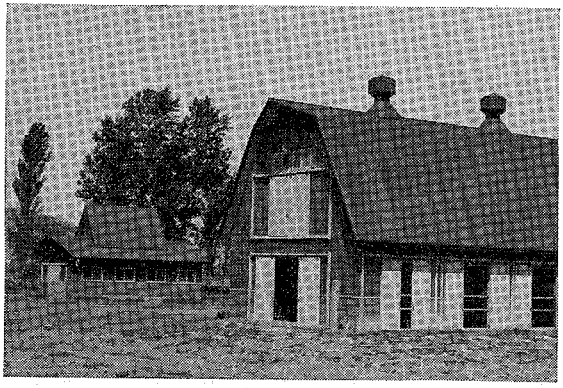
一九六二年（昭和三七）は学部創立十周年でもあり、運動にさらに力が加わった。要求は本館三階建て、予定総面積二三六三・七五坪を二年分割とし、家畜病院を主体に一〇一三・七五坪と文教予算枠外に付属施設四四一・五坪であり、八月文部省における交渉の結果、採用予定分は大約八〇〇坪と推定された。このようにして新館建設に具体化の方向が見えだしたのである。

翌一九六三年に至り、第一期工事が実現することとなった。家畜病院を中心に臨床関係教室、健体解剖室等八四九・一三坪の建設の起工式が十月九日に行われた。用地についてはさきに第一農場が考えられていたが、その後クラーク会館西側（農学部南側）の案を経て、第二農場南側（北一八条西一〇丁目、約一万二〇〇〇坪）に落ち着いた。しかし低湿地であるため相当の客土を必要とした。

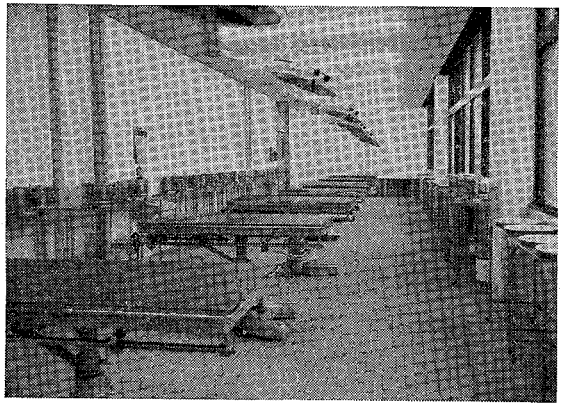
かくして一九六四年（昭和三九）第一期工事が完成し、一九六六年をもって第三期工事終了に至ったが、その間必ずしも平坦な経過をたどったわけではない。その困難の一つは、第二期工事が終わった段階でなお農学部建物内に六講座、事務室、図書室などが残っていたことである。このころ大学内に、農学部で獣医学部が使用している部分は借用分ではなく、獣医学部のものであり、したがって全部が耐火建築に納まった以上、ほかに老朽建物の部局も多いことであり、一休みしたらとの声が強くなり、八月次年度予算編成期にはかなり悲観的な立場に置かれていた。しかし、大学当局、文部省、文部省札幌工事事務所などと熱心な話し合いが続けられて、結局残り一一七五坪がそのまま

枠内に入って無事に済んだのである。第二は獣医学部旧校舎の火災である。一九六四年ちょうど第一期工事完成の年の二月三日深夜、木造二階建て本館一部を焼き四日午前〇時半ごろ一旦鎮火、さらに午前四時五十分ごろ再出火し一時間ほどで消火、家畜内科学及び外科学講座実験室合計二八九平方メートルが焼失した。結局は不明火として落着したが、新館完成が近かったのは不幸中の幸いで、それがなければたいへんな混乱になるところであった。

この年三月二十五日第一期工事落成に伴い六月八日を期して家畜内科学、家畜外科学及び家畜臨床繁殖学講座、附属家畜病院が旧校舎から新校舎に移転を完了した。東洋一を誇る家畜病院がその偉容を示すこととなったが、基礎系講座や事務室などは一キロ以上も離れており、職員・学生にとって日常の不便さはかえって増幅されたのである。ついで翌一九六五年三月二十五日をもって学部本館の一部教室、実験室二一八五平方メートル、平病入院舎一六三平方メートル、伝染病入院舎八六平方メートル、環境調整装置六六平方メートルが落成した。六月十、十一両日に比較



大動物入院厩舎（1966年７月）
手前平病入院舎、後方伝染病入院舎



附属家畜病院手術実習室（1964年10月）



解剖学学生実習（1966年11月21日）

病理学、家畜解剖学及び家畜寄生虫病学講座が農学部校舎から、また前年いったん家畜病院内に落ち着いていた家畜外科学講座が家畜病院から、それぞれ移転を完了した。さらに一九六六年三月二十五日第三期工事として残りの教室・実験室三八一六平方メートルが完成し、五月九～十一日に家畜生理学、家畜生化学、家畜薬理学、家畜衛生学、獣医公衆衛生学および家畜伝染病学の六講座、事務室及び図書室が農学部校舎から移転し、学部全体がようやく同じ場所に集結できたのである。七月九日新装成った学部会議室において校舎新築落成記念式典が挙行された。

その後年を追って建物・環境の整備が進められ、一九七一年（昭和四六）十一月二十日獣医放射線研究棟七〇〇平方メートルの新築工事落成をもっていちおうの構想終了を見るに至り、現在敷地総計四万〇八五九平方メートル、建物面積一万〇七七四平方メートルとなっている。

五　六年制へ向けて

獣医学教育年限延長については、一九四七年（昭和二二）新制大学発足当初から問題にされ、日本獣医師会が中心となって取り上げられてきたが、具体的に実現に向けて検討されるようになったのは一九七五年（昭和五〇）である。

ここでは以下にその動向を列挙することとする。

一九五〇年（昭和二五）十二月、日本獣医師会獣医事審議会は、教育刷新審議会に獣医学教育年限の延長を要請した。

一九五一年四月、教育刷新審議会は、「四カ年では不十分と認められるが、現下の国情ではやむを得ないので当分四カ年とする。ただし不足を補充するため、専攻科等を置く措置を講ずることが望ましい」との結論を出した。

一九六二年（昭和三七）四月、日本獣医師会獣医事審議会は、中央教育審議会に獣医学教育年限の延長を要請した。

一九六三年一月、中央教育審議会は、文部大臣に「大学教育の改善について」次のように答申した。

学部の修業年限に関しては、特定の専攻分野について、現在の修業年限の延長を希望する意見がある。しかし、現行制度のもとで教育内容・教育方法の改善等の措置を講ずれば、しいて修業年限を変えなくともよいと思う。ただし上記の措置を考慮したうえでも、なお必要な専門能力を育成しえない専攻分野においては、修業年限の延長もやむを得ない。

最初内外の獣医学教育事情をかんがみて起こった年限延長問題は、日本獣医師会を中心とする運動にとどまって一〇年以上の時が過ぎたのである。しかし一九七〇年（昭和四五）からこの問題が再度検討されるようになった。この年十月日本獣医師会獣医事審議会委員長（越智勇一）から、獣医学教育年限を六年に延長すること、及びこれに伴う教育基準の詳細な答申が得られ、十一月中央教育審議会に要望が出された。答申の冒頭に次のように述べられている。

現行の獣医学教育においては専門教育の年限が二年にすぎないため、獣医師として社会において責任を果たすに必要な獣医学術を十分に履修するためには、教育年限が絶対的に不足している。（中略）しかも諸外国では獣医学の専門教育のみに四年ないし七年を費している現況において、世界で最も教育年限の短いわが国は国際交流の立場においても甚だ不利な状態にある。すでに昭和三十七年四月三十日、獣医事審議会委員長より中央教育審議会長宛に獣医学教育年限の延長を要請してある

が、（中略）その専門教育を四年以上（通算六年以上）とすることの急速な実現をはかろうとするものである本答申では同時に、四年間の総授業時間数は講義・実験・実習を含めて四二〇〇時間以上、必要な講座数は一六以上とされている。

一九七一年（昭和四六）十一月、日本学術会議は内閣総理大臣に獣医学修業年限の延長を勧告し、この問題についてはさらに翌年十月農林省畜産局長が文部省大学学術局長に、一九七三年六月農林省獣医師免許審議会が文部大臣に要望した。

一九七四年四月、文部省獣医学視学委員会が年限延長について報告した。

以上の経過をもって一九七五年六月二十八日、文部省に「獣医学教育の改善に関する調査研究会議」が置かれ、第一回会議が開催された。この時主査に越智勇一が選出され、北大からは酒井保が参加した。また調査項目は次のとおりである。

1　修業年限延長の必要性について
(1)　獣医学教育の目標及び教育内容
(2)　獣医師の需給
2　学部・学科組織のあり方について
(1)　農学部との関係
(2)　畜産学関連分野との関係
(3)　大学院（修士課程）との関係
(4)　獣医関係学部・学科の規模及び配置
3　獣医学教育基準について
(1)　卒業要件

(2)　教官組織等

4　その他、経過措置等

調査研究会議は一九七五年度に七回開かれ、一九七六年三月二十九日には、越智勇一主査から佐野文一郎文部省大学局長に「獣医学教育の改善について」が答申されるに至った。さらに年度が変わって五月十七日にも会議が開かれた。三月二十九日の答申中にいくつかの問題点が盛り込まれているが、とくに以下の記述が重要と考えられる。

学部・学科等の組織

(1)　獣医学教育の年限を六年に延長する場合の教育組織の在り方については、学部の修業年限を六年とする方式と、学部の四年と大学院修士課程の二年を積み上げて六年の教育を実施する方式とが考えられるが、六年間を一貫した効果的な教育を実施し得るよう学校教育法を改正し、獣医学の課程については学部の修業年限を六年とすることが最も望ましい。

(2)　しかし学部修業年限の延長については、現状において次のような問題点がある。

①　現在、多くの獣医学関係学科は、農学系学部の中に位置付けられているが、四年制学部の中で獣医関係学科のみを六年とすることは、制度的にもまた運営上も適当でなく、学部修業年限を延長する場合には、獣医学部として独立させることが望ましい。しかし、国立大学関係学科の全部を学部に改組することは、小規模の学科が数多く設置されている現状のままでは極めて困難であり、学部の六年制を実施するためには学科の統合等の困難な課題に、今後取り組む必要がある。(以下略)

(3)　(前略)学科の統合を含め獣医学関係学科の重点的な整備の努力を続けた上で適当な時期を検討するものとし、当面は修士課程を活用し、(中略)このような修士積み上げ方式を採る場合、獣医師国家試験の受験資格を修士課程終了者とするための獣医師法の改正が必要である。(以下略)

かくして獣医学教育は年限延長に向かって歩を進め始めたのであるが、前述のように、修士課程積み上げ方式、統合問題、獣医師法改正等多くの問題が前途に横たわっている。しかし状勢としては、近く年限延長が達成される見通しとなったのである。

参考文献

北海道大学獣医学部、『創立一〇周年記念北海道大学獣医学部史』、一九六三年（昭和三八）三月三十一日　北大獣医学部同窓会、『北大獣医学部同窓会報』、第一号～第一九号、一九五八年（昭和三三）～一九七六年（昭和五一）　北海道獣医師会、『北海道獣医師会二十年史』、一九六九年（昭和四四）八月三十日　今井源四郎、「北海道獣医事々始め、その2、札幌農学校と獣医教育」、『北海道獣誌会雑誌』、第一巻、第三号、五三～五六ページ、一九五七年（昭和三二）

あとがき

獣医学部は、一九七七年（昭和五二）をもって学部創設二十五周年及び獣医学開講百年を迎え、同年九月十四日の記念式典を中心に諸行事が行われた。このように当学部は札幌農学校時代にさかのぼる長い前史を経ているが、本稿ではできるだけ簡略に触れざるを得なかった。その多くは農学部部局史に記述されているし、さらに詳細を望めば、一九六三年（昭和三八）発行『創立一〇周年記念北海道大学獣医学部史』があるからである。

本邦における獣医学教育は、現在大きな転換期にあるといえる。獣医学教育六年制問題が日本獣医師会を中心に一九五〇年（昭和二五）以来検討されてきたのである。部局史編集上、記述を一九七六年（昭和五一）までで打ち切ったが翌一九七七年獣医学教育修業年限延長を目的とした獣医師法の一部改正は、五月十二日衆議院農林水産委員会、五月十三日衆議院本会議、五月十九日参議院農林水産委員会、五月二十日参議院本会議においてそれぞれ可決された。その結果「獣医師法の一部を改正する法律」（法律第四七号、農林省）が五月二十七日公布され、獣医師国家試験受験資格は修士課程終了者に引き上げられることとなった（一九七八年四月一日施行）。したがって、一九七八年度以降の大学入学者は、この法律の適用を受けるわけで、今後は文部省側の諸措置が必要であり、将来は六年制完全実施が見込まれるのである。以上追記の意味を含めて記すこととした。

（大林正士）

年表

一九五二（昭27）
3・31　法律第二二号をもって、農学部獣医学科を獣医学部に昇格（4・1施行）
4・1　家畜内科学、家畜外科学、家畜衛生学、比較病理学、家畜解剖学、家畜生理学及び獣医公衆衛生学講座を置き、学科を獣医学科と定め、獣医学第一及び獣医学第二講座をそれぞれ家畜内科学及び家畜外科学講座と改む。黒澤亮助学部長となる
6・11　小華和忠士名誉教授となる
7・18　中央講堂において、獣医学部開学式典
9・30　北海道大学獣医学部規程を制定

一九五三（昭28）
1・31　邦文獣医学部紀要『獣医学研究』を発刊
3・25　旧制最終及び新制最初の農学部学生卒業式
3・31　北海道大学大学院に獣医学研究科を設置（4・1施行）
4・1　家畜生化学及び家畜伝染病学講座増設
5・11　新制大学院最初の入学式
5・13　大学院獣医学研究科に、予防治療学専攻及び形態機能学専攻（博士・修士課程）を置く
7・28　家畜病院を設置（8・1施行）

一九五四（昭29）
3・25　農学部獣医学科として最終卒業式
3・30　獣医学部紀要を欧文誌 The Japanese Journal of Veterinary Research に改め発刊
4・1　家畜薬理学及び家畜臨床繁殖学講座増設、農学部の獣医学科を廃止
9・10　第三八回日本獣医学会を開催（中央講堂）（〜9・11）

一九五五（昭30）
3・17　北海道大学大学院獣医学研究科規程を制定
3・25　獣医学部として最初の卒業式
4・1　山極三郎学部長となる
4・8　黒澤亮助名誉教授となる
7・1　家畜寄生虫病学講座を増設

一九五七（昭32）
5・25　獣医学部同窓会発会

一九五九（昭34）
5・27　家畜生理学、家畜生化学、家畜薬理学及び家畜寄生虫病学講座農学部東南側の新築校舎に移転

一九六〇（昭35）
4・18　比較病理学講座農学部東南側の新築校舎に移転
7・13　家畜衛生学、家畜解剖学、獣医公衆衛生学及び家

9・15　畜伝染病学講座、事務室及び図書室農学部東南側の新築校舎に移転
家畜内科学、家畜外科学及び家畜臨床繁殖学講座、他講座等の農学部への移転跡に移転

一九六一（昭36）
11・27　家畜病院規程を全面的に改定（12・1から実施）

一九六二（昭37）
1・10　高畑倉彦学部長となる
4・25　山極三郎名誉教授となる
9・28　クラーク記念会館において、獣医学部創立十周年記念式典を行う

一九六三（昭38）
3・31　『創立十周年記念北海道大学獣医学部史』を発行
10・9　獣医学部新館建設第一期工事の起工式を行う（農学部附属第二農場南側）

一九六四（昭39）
1・10　山下次郎学部長となる
2・3　家畜内科学及び家畜外科学講座実験室二八九平方メートル焼失
3・25　獣医学部教室及び附属家畜病院二八〇七平方メートル新築工事落成
4・22　高畑倉彦名誉教授となる
6・8　家畜内科学、家畜外科学及び家畜臨床繁殖学講座、附属家畜病院、旧校舎より新校舎に移転

一九六五（昭40）
3・25　獣医学部教室及び実験室二一八五平方メートル、平病入院舎一六三平方メートル、伝染病入院舎八六平方メートル、環境調整装置六六平方メートルの新築工事落成
6・10　家畜外科学（附属家畜病院より）、比較病理学、家畜解剖学及び家畜寄生虫病学講座、農学部校舎より新築校舎に移転（～6・11）
12・19　平戸勝七教授（家畜衛生学講座）逝去

一九六六（昭41）
1・10　浜田輔一学部長となる
3・25　獣医学部教室及び実験室三八一六平方メートルの増築工事落成
5・9　家畜生理学、家畜生化学、家畜薬理学、家畜衛生学、獣医公衆衛生学及び家畜伝染病学講座、事務室及び図書室、農学部校舎より新築校舎に移転（～5・11）
7・9　獣医学部会議室において校舎新築落成記念式典を行う

一九六七（昭42）
2・27　羽賀正教授（家畜生化学講座）逝去
12・9　実験動物舎一七六平方メートルの新築工事落成

一九六八（昭43）
1・10　山下次郎学部長となる
8・26　第六六回日本獣医学会を開催（教養部校舎）（～8・28）

一九六九（昭44）
5・21　獣医放射線学講座を増設、実験研究室を附属家畜

一病院内に置く

一九七一（昭46）
11・20　獣医学部実験研究室（獣医放射線研究棟）七〇〇平方メートルの新築工事落成（12・10移転完了）

一九七二（昭47）
1・10　三浦四郎学部長となる

一九七三（昭48）
4・1　酒井保学部長となる
5・23　三浦四郎名誉教授となる

一九七五（昭50）
4・1　酒井保学部長事務取扱となる
5・21　山下次郎名誉教授となる

一九七六（昭51）
3・18　獣医学部長候補者選考内規を改正
5・1　工藤宣夫学部長となる
10・18　教授会において一九七七年に獣医学部創設二十五周年記念事業を実施することを決定